
ハリーポッターに怒りの転生

めだかクロニクル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハリーポッターに怒りの転生

【Nコード】

N4196Q

【作者名】

めだかクロニクル

【あらすじ】

ハリーポッターの世界に転生します。

不思議と、作者と会話すると言う不思議な雰囲気ですが宜しくお願ひします。

世界に転生の前（前書き）

ハリーポッターの世界で頑張る、童顔少年の物語。

世界に転生の前

「君、死んだから」

「ご飯がすすむ君で食べようかな。さらさら鮭茶づけでたべようかな」

「聞いている？」

「聞いている。やっぱり、鰹節ふりかけの、めんつゆかけの、チャーシュー焼きのでいただきます。君も食べる？用意したけど」

「あつ、おいしそう。食べます」

「うまつつ何だこれ、神の私も食べた事ない、神の味」

「でしょ？この味が忘れられないから死ねないんだよ」

「・・・ごめん」

「何？」

「・・・ごめん・・・死んだ」

「僕さ、ちよつと前まで引きこもりだったんだよ。前にさ、イジメ問題解決しようとしたら、先生が生徒集めて、俺を悪者にしようと計画したみたいでさ、大人信用できなくなったんだよ。だけど、ハリポッター読んでたら生きるってすばらしいって思ってたさ、友情を感じたくなつていま 今ハッピーな学生生活送ってるんだ」

「・・・まじでごめん・・・君死んだんだ・・・」

「・・・生きてて良かった〜日本食、食えなくなるとか死んだわ〜って感じだわ。イギリス行って、あんな冷凍食品万歳の食事食うかと思ったら死んだほうがましだわ」

「・・・ごめん」

「お前・・・ぶつ殺していい？？どうせ、お前は神で、間違つて殺したとか言っただろ？？それで最後にドッキリ〜って言っただろ？ベタだね〜」

「・・・ドッキリじゃない」

「・・・雰囲気的に、黒すぎる空間に、僕と君が白くなってるから

不自然だし、思ったものが出てくるから不自然に思ってたけど・・・
僕・・・死んだの？」

「ごめん・・・雷ドツカンするの間違えた・・・」

「感電死したの？」

「・・・焼け死んだ」

「？」

「雷ドツカンで死ななきゃいけない運命の人がいて、ドツカンしようとしたら、直前に、お前は、そこにはいけないとか言って、君が飛び込んできて・・・」

「死んだの？」

「うん・・・君は、先代代の神の生まれ変わりだから、何が起きるか分かったんだろうね・・・」

「僕の前世が神？神も輪廻転生に含まれるの!？」

「君は、神の仕事飽きたとか言って、アデューって言いながら転生した。そんな神見た事ねえよ、後処理丸投げしやがって、前の神は過労で壊れて、誰もやりたくないからって、俺に無理やりやらせやがって」

「怒ってる？」

「当たり前」

「何かごめんね。大変だったんだね。よく頑張ったね」

「そんな言葉かけないでー！ー泣いちゃう!!!そんな綺麗な目で見つめないでー」

「良いんだよ泣いて。ここには、僕しかいないから。誰も見てないひとしきり泣いた後、話が戻った。

「それで、僕は元神様なんだね」

「うん、じゃなきゃ、この空間で、好き勝手に物を造れない」

「ふ〜ん、じゃあ、君は神殺しなのね」

「!!!・・・マジでごめん。許して。何でもするから」

「蘇らせて」

「あの黒焦げに???痛いだけで、すぐ死ぬと思うけど・・・」

「他の身体になったらどうするの？」

「その人を別の世界に転移させて、君をその身体に入れるけど」

「え???別世界???」

「元神様でも忘れてるよね。この世界の創作物は他の世界の思念から出来てる物だから。っていうか、その法則創ったの君だけだね」

「まじ???じゃあ、僕が大好きな、ナルトや、×××HORICとかハリーポッターは現実にどっかで存在してるの?」

「当たり前じゃん。じゃなきゃ、あんな凡人に想像できないでしょ」

「作者馬鹿にしたら、殺すぞ」

「ごめんなさい。つてかキャラ違う」

「そう?」

「黒いよこの人。絶対さっきの、自分が優位に立つ為の演技だ」

「うん?」

「何でもないです」

「じゃあ、僕を転生させる。それで許す」

「???まじ〜ぶったまげ〜許してもらえないの!!何でもしちゃうよ」

「とりあえず、ハリーポッターの世界に転生させる」

「許してもらえないなら何でも良いよ。転生するだけ??」

「どういう意味??」

「他の間違えて殺した人は、能力とか要求してくけど」

「お前何人殺してるの・・・」

「299人!!君で300人目達成!!」

「神に復活したら殺すから」

「何でもしますから許してください。特典いくつでもつけますから」

「しょうがないか。今は君が神だもんな」

「僕が新世界の神だ」

「だまれ!!」

「はい・・・」

「能力特典は、とりあえず、魔力キャパシティ無限、ハリーポッター世界の魔法を全て使える、×××HORICの魔法全部できる、

肉体年齢、性別を自由自在に変えられる、新術、魔法の開発が可能な知識、後は自分の境遇を自由に相手に変えられる能力」

「わかりました〜最後のはどついう意味ですか？」

「ハリーの兄弟って言ったら、ハリーの兄弟設定、シリウスの従兄弟って言ったらシリウスの従兄弟設定って事だ」

「はい、そうしときます。後はないですか？」

「う〜ん転生した後の特典追加が欲しいな」

「うっ・・・そんな発想してきた人はいませんでした。あほなチー卜能力のみしか要求してこない人ばかりだったのに」

「ちなみに、どんな能力要求してくる人が多いの？」

「多いのは、ギアスの能力全部とか、肉体最強とか、七美の能力とかドラクエの魔法とか、ナルトの術とか、後は魔眼とかですかね」

「・・・知らない」

「え？」

「今言われた能力、ほとんど知らない」

「珍しいですね、オタクじゃない人が死ぬなんて。 ×××H O R I Cとか知ってるから詳しい人かと思ったんですが」

「違う!!! 僕は、オタクだ!!! ただ、ちよつと、好きなアニメが偏ってるだけなんだ!!! 知ってるよVガンダムとか、カテコウとかいう単語知ってるんだからね」

「そこでキレルんですか、全般的に網羅してないと」

「だって、家の中にいるより、外で蛙さんと喋る方が楽しいんだもん。ドラクエとか難しすぎてできないし」

「痛いですね」

「泣くから。元神様なかしたって先生にチクツてやる」

「え??? 泣かないで下さい。そんな目しないで、許してください。何でもいう事聞きますから」

「じゃあさっきの、お願い聞いて」

「また演技か。う〜ん特典追加。そんな発想した人いないからな」

「元、神だからね、もしもの事を考えて準備しとくさ。だめか??」

「そんな、可愛い顔で怖い顔しないで欲しいよ」

「可愛い??死ぬか?」

「ひっ!!追加特典の様な物でしたら、あの方に頼めば動ですか?」

「どのかた?」

「今書いてる方」

作者協力するの？

ひっ！！追加特典の様な物でしたら、あの方に頼めば動ですか？」

「どのかた？」

「今書いてる方」

「止まらないで下さいよ」

「だから止まらないで下さい。書き込んで会話してください」

「俺？」

「そう、作者さんです」

「どういうこと？」

「さっきも言いましたが、創作物は別世界の情報が流入してるだけなんですよ」

「え？じゃあ今書いてる事も、現実に？」

「なってますよ」

「マジか。俺がここで止めたら？」

「リンクしてるので、進まないですね」

「俺はどうすればいいの？」

「話を完結させてください」

「完」

「今地震あったんだけど」

「私が起こしました、次ふざけたら、雷ドツカンしますよ」

「わかりました。それで、転生者君に何をすれば？」

「普通にかいて下さい。助けがほしいときは喋らせますから」

「わかりました。」

むかつく突然の展開

「話は付きました。困った事があれば、作者さんに頼んでください。」

「あ〜うん。わかった。」

「姿はそのままが良いですか？指定していく人いますけど」

「どんな？」

「男の子の場合は、何か美男子にしていきますね。女の子の場合は、髪の色変えたり、何か長い人が多いですね」

「美男子は嫌いだな。自分の顔気に入ってるしな」

「そうですね、美男子って感じじゃなく、やんちゃなシヨタっ子って感じですよんね」

「何て言った？」

「何でもないです。怖いからとつととハリーポッター世界に行ってください。作者早くしてください。お願いします」

「はいはい」

洗濯機の中に入れられたような変な感じがして、吹き飛ばされた。黒から白の世界に良き、あれは？鋼の錬？？通り過ぎて、カラーの世界に降り立った。

「ここが、ハリーポッターの世界ね。けっこう普通だな。僕の不可思議さと比べたら、時限の魔女以外は何でも普通か」

歩きながら、ここは、魔法使いの、町だとは分かったが、ホグズミードではないようだ。原作に出てないから、どこか分からない。

「一般人もいるから、普通の町か？」

しばらく歩くと、石の壁に、ゴドリックの谷と書いてある。

「え？こんな所なの？もつと田舎かと思った」

「お前、唯の壁に何話しかけてんの？」

「この壁の字」

「は？」

見えてないのか、魔法の字か？

風が吹いて新聞が飛んできた。情報が知りたいと、拾った。

「何してんの？」

これも、魔法で見えないのか。

「変な奴」

そう言つて、子どもは消えた。

新聞を読み始めると、驚愕の表紙が目飛び込んだ。

ダンブルドア殺される 追悼式は

「死んでんじゃねえか！！ 最終巻の時代に飛ばすとか何考えてんの！！ 普通、石だろ石のあたりに飛ばすだろ！ これじゃ、隠れるハリーに会えねえし、可愛くてハグしたくならねえ大人ハリーにしか会えねえだろ」

沸点が湧き上がった。

「あの！！ ボケ！！！！！！」

怒りに震えた管状が伝わったのか

「ひっ」

と言う声が聞こえた気がした。

「とりあえず、今いつだ？ 状況が把握できない。 ってか転生じゃなくてトリップしてるし」

てくてく

「やめろ、てくてくって足音になってる。 恥ずかしいから、文才は求めないから、少し小説っぽくして」

「努力します」

情報を収集しようとして道を歩き始めた。

しばらく歩くと、閑静な住宅街に似つかわしくない光景が目に入った。

「これが、ハリーの家か」

そこには、瓦礫の山と化した木々があった。

そこが、家だと分かったのは、立て札にポッター家であると記されていたからである。

「どうするかな。季節は昼間に子どもがいたし、夏休みくらいの時期かな。ってことは、まだ、追悼式はやってないだろ。ハリーの家に行けば、まだ、脱出の最中かな。姿現し試すか。イメージが大事なんだよな」

目を閉じ、意識を集中させた。

プリモールド、ハリーの家。イメージを描き、飛んだ。

「ふうん。イメージどりの場所だな」

家をのドアをノックしたが、返事がない。

「いないのか。うん。あれを使うか」

左手を前に出し、魔法人を創る。

「我、探す彼の者。我を導き、彼の元へ姿を現せ」

魔方陣が光り、白く光る燕が現れ現れた。

その燕に触れると、一瞬暗くなり、そして明るくなった。

ふわっとする嫌な感覚、そして、身体を加工させようとする力、足元がない。

あまりの事に、見苦しくも叫ぼうとする声も出ない。

口をグツと噛み。恐怖が頭を支配した。しばらく落ちると、アドレナリンで頭がはつきりする。時間が、とても短く感じた。

救う代償

「浮く、その方法だ。目を閉じ、イメージを作り、目を開いた。」

「浮いてる。大丈夫、力は使える」

周りを見渡すと、大分落ちたのだろう、上のほうで光線が飛び交っている。

「ハリーが襲われている時か、急がなくちゃ」

風を切る音が激しさを増す、はやくもつと早く、そう思う事で、スピードが上がった。

「まだ、遅い。我、求む、我より早き、機械、現れよ」

シュっという音がして足元に感覚が合った。

「メーヴェエ？マジか憧れのメーヴェじゃん。こいつ僕より早いのか。さすが、未来世界」

アクセルを一気に踏み込み、加速した。

人間が一瞬で過ぎ去っていく。

「危ない！！」

見覚えのある顔が、見知らぬ顔から呪を受けようとしていた。杖などない。指を杖代わりに、守りの魔法を使った。

「プロテゴネスト」

緑色の光線が、跳ね返り、打った相手に直撃した。

「殺した？僕が？」

次に飛び込んだできた光景は、ロンが呪を受けようとしている光景。

「くそっ」

そう言いながら、呪をかけようとしている奴を殴りつける。

「早くハリーの元に行かなくちゃ。あれはスネイプ」

見るとスネイプが、目の前にいる死食い人を退け、呪文を放とうとしていた。

「あれは、双子のどっちか。怪我させるか！！！！」

後一步のところで呪文が放たれた。続けざま、スネイプの横を通り

過ぎ、双子の片割れをキャッチした。

「後は任せる」

そう言つて、ルーピンに押し付けた。

ルーピンは、困惑した顔だったので続いて付け足す。

「ダンブルドアよ。永遠なり」

そう言つて、横を通り過ぎた。

「ハリーどこだ。あの光は」

廻りの光線とは明らかに違う、光があった。

「あそこか」

近づく、ヴォルデモートの杖が破壊されている所だった。

「ヘドヴィグは死んだか!!!クソッ、主を守りし、誇り高き勇敢な鳥よ。私の元へ。彷徨える魂、今だ、誇りを忘れぬ暖かき身体へ還りたまえ」

ヘドヴィグが生きた姿で現れた。

「ッグ、何だ」

身体から突然何かが抜ける脱力感と頭に違和感があった。

そんな事よりもヴォルデモートは杖を砕かれても、尚、ハリーを追おうとした。

「ヴォルデモート!!!くらえ!!!」

牽制に五指から放たれる、呪文をいとも容易く避けると、僕を睨んで来た。

「何者だ。その様な呪文の出し方をすると」

「お前に関係ない。我、守りたきもの有り、邪念を擁きし者を退けよ」

「何だ、これは!!!」

そう言いながら、見えない壁に押されるように、退けられた。

「怖いな、さすが闇の帝王だ。ハリーを追うか」

ハリーの乗ったバイクを見つけ、後を追った。途中、後ろから追ってくる死食い人を退けた。

突然ハリーが消えた。隠れ穴に着いたのだろうと思ひ、魔法で張つてある結界を、壊さないように、クロウの魔術で通り抜けた。

「誰……！」

そういつて、杖を向けてくる、2人の魔法使いはモリーとハグリッドだった。

「ママ……！子どもだよ」

僕は、もう、15歳なんだけどな。童顔の日本人だからしょうがないか。

「手を上げます。何ならはだかになりましょうか？僕は、ハリーを守りに来ました。ダンブルドアよ永遠なり。ヴォルデモートは、糞食らえ」

「なっ……！」

驚かれるのも、無理はないと思つた。知らない奴が、守りの魔法を抜けて突然現れて、それも、子ども、驚くだろうと思つた。

その時、突然、人が飛び込んできた。血だらけの人を支えて、歩いてきた。

「ジョージがやられた」

僕は、走り出した。

途中、全員から杖を向けられた。

「治療が先だ……！信用できないなら、杖を向けている！」

若い世代は杖を降ろしたが、やはり修羅場を経験している大人世代は杖を降ろさなかつた。

「出欠が思つていたより酷い、急がなければ。歌うように言つただか？」

オペラのように歌つた。

「血が止まらない。クソ……！我の前に横たわりし傷つき身体、元の姿を取り戻せ」

直つた。そう思つた瞬間、強烈な脱力感が遅い立っていられなくなつた。

地面の泥の上に、這い蹲り、身体に力が入らない。

「僕!!!」

「誰が僕だよ、そう思った。復活したら、痛い目に合わせてやるからな」

そう、呟いて、意識がなくなった。

予定外 ロン？

誰かが叫ぶ声で意識を取り戻した。

顔をクシャクシャにして、誰もが叫んでいた。

リーマス顔を青ざめている傍らに、トンクスが寄り添っている。

次に目に飛び込んできたのは、ロンが横たわる姿だった。

ロンの名前を叫ぶ声が、空しく響く。

「死なないでロン！！目を開けて、ロン！！ロン！！！！」

しばらく呆然としていたが、死という言葉に切っ掛けに身体が動いた。

「いつだ！！いつ死んだ？」

「なっ！？」

受け入れられないのだろうか、怒りの表情を向けてくる。

時間が惜しかったので、端にいるトンクスに向かった。

「たしかロンと一緒にいたのはトンクスだったよね。ロンが死んでからどのくらい時間が経ってる？」

必死の形相にたじろいだ、トンクスが返答を返す。

「20分くらい」

「良かった！！まだ間に合う」

ロンの身体の側に泣き崩れている人達に言った。

「どいてください。今からロンの魂を呼び戻します」

「子どもが出る幕じゃない！！！」

アーサーに怒鳴られ、驚いたが、時間がなかったので、術を行使した。

「友を守りし、志高き魂、今元の身体へ」

術の発動と同時に円陣が現れた。

その円陣を、見て驚きの顔をする人々。

次になった表情は、驚愕と喜びの表情だった。

「ロン！！！！」

ロンが起き上がったのだ。

ロンに駆け寄っていく人々の傍らで、身体がぐらりと揺れた。

突然、口の中にこみ上げる物があり、鉄の味が広がる。そのまま、吐血した。

いち早くきずいた、リーマスとトンクスが駆け寄ってきて倒れそうな身体をささえた。

「すみませんが、回復呪文かけてもらえますか？あとできれば、爪を切って僕の口の中に入れてくれませんか？体の回復を早めたいので」

「トンクス呪文を頼む」

そう言つてリーマスは手の爪に、清めの呪文を放ち、引っこ抜いた。予想外の行動に驚いたが、説明するのめんどくさいので、血まみれの爪を口の中に入れる。

爪を引っこ抜くなら、清めの呪文は後からで良いんじゃないのかと疑問がわいた。

魔法陣を出し、爪の細胞をバラバラにし、体の各部に送っていき、傷を埋めていく。

しばらく繰り返すうちに、体の傷は癒えた。

「回復呪文つて、痒いんですね」

「もう大丈夫なの？」

「何とか」

短い間で傷を癒した事に驚愕に表情を見せ言った。

「私の呪文必要だった？」

「同時進行じゃなきゃ、こんなに早く直りませんよ」

「他に何かすることある？」

「お腹が減りました」

「ふふ。これ食べて、もうちょっと待つてくれる。ロンが生き返つてみんな喜んで、私たちの事に気付いてないみたいだから」

そう言つて、手に収まらないほどの大きなクッキーを渡してきた。クッキーを見ると、満面の笑みをして食べ始めた。

「おいしい」

そういつて、リーマスを見ると、手から血が出ていた。

「ごめんなさい。忘れてました。すぐに直します。手を出してください」

出された手の指を口の中にいれ、先ほどリーマスから貰った爪の細胞を増殖させ、爪を復元させた。

「はい。終わったよ」

「もう?」

そういつて、リーマスは手を見たが、爪は綺麗に揃っていた。

「しまった」

「どうした?」

「リーマスさん、ごめんなさい。クッキー食べてる時にやっちゃったから砂糖の成分入っちゃたかも」

そういつと、リーマスは、自分の指を舐め、笑った。

「すぐに直します」

「それはだめだ。便利な指だから放っておいてくれ。紅茶を飲む時に指で混ぜるだけなんて何て便利なんだ」

リーマスが子どものようににはしゃぐ活き活きした顔をしながら言った。

「気に入ってるなら何もしないよ。リーマスさんってこういう性格なの?」

トングスに聞いた。

「キュートでしょ?」

「仲良く慣れそう」

「そろそろ、私もお腹がすいたわね」

「リーマスもお腹減ったでしょ?」

指を舐めだしそうなほどウツトリと眺めるリーマスに聞いた。

「え?あつうん。そうだな」

「ロン生還おめでとう。みんな、ロンが生き返ってよかったわね。ところで私たち、朝から何も食べてなくて餓死しそうなんだけど」

はつとした顔をみんながして、お腹に手を当てた。

「どうやら、みんなもお腹が空いていたらしい。」

「安心したら、お腹空いちちゃったね」

「誰のせいだと思ってるの？さっきまで一生何も食べたくないって思うほどだったのよ。ねえハリー？」

「ハーマイオーニーが言った。」

「お腹空いてるかどうかなんて忘れてたね。でも確かにロンの言うとおり、お腹減った」

「そうねご飯にしましょうね。今日はお祝いよ」

「モリーはそう言って、杖を振るった。」

もちろん偽名

「うわー。おいしそう」

「ほら、みんな席について」

全員が席に着き、食べ始めた。

「これは、何て食べ物？」

隣に座っている、トンクスに聞く。

「キツシュよ」

「これは何の肉？」

「ほろほろ鳥よ」

「おいしいね。こんなおいしい料理食べた事ない。あっロン、その、パンとって」

「うん」

パンを取って渡すロンが怪訝な顔をした。

「君は誰？」

その、言葉に全員の動きが止まった。バタバタしていて忘れていたのだ。

視線が注目する。

「誰って言われても、名前は遠藤小林。もちろん偽名」

視線が痛みにつめき声が漏れそうだった。

「本名は簡単に教えられない。そういう、術を使うから」

「では、君は何故ここにいる？」

「リーマスさん怖いです。ダンブルドアの命でハリーを守りに来ました」

完璧なる嘘を真顔でつく、しかし、こうでも言わなければ、信じてもらえない。

「君の様な、子どもが？」

「子ども子どもって多少幼く見えるか見知れませんが、いくつだと思ってるんですか？」

「5歳くらい？」

真顔で言われて、シヨックを受ける。

「それはさすがに酷いんじゃない？」

「だってねー？」

みんなが頷いている。

とてつもない違和感、よく考えると、身長差がおかしい。

「鏡下さい」

トungkusが鏡を貸してくれた。

「なんじゃこりゃー。誰これ？僕なの？何でこんなに小さくなっての？アポトキシン？転生ってこういうこと？違うよね」

「どうしたのちよつと落ち着いて、お水飲んで」

貰った水を一気に飲み干し、落ち着ける。

「薬で姿を変えてるの？君は本当はいくつなの」

「実年齢は15歳。薬で姿を変えてるわけじゃない」

「やっぱ子どもなのね」

「でも良く考えたら、年齢を元に戻せばよかつたんだよね」

「え？老け薬を使うの？」

「ううん、ゆびぱっちゃん」

カスツという、指ぱっちゃん失敗の音と共に年齢を実年齢まであげた。

「どう？戻った？」

「戻ってないわ、せいぜい10歳くらいよ」

びっくりして鏡を見ると、ちゃんと元に戻っていた。

「戻ってます」

「え？」

「これで一様15歳です」

「そうなの？」

「あなた、アジアよね？」

「ジャパンです」

「ジャパン？」

「私知ってるは、東洋の島国で、箸とかいうもので全てを切り裂き、全てを突き刺し、腐った豆を食べるのが日本人よね」

「驚愕と言うより、マイナスの驚愕という顔をしていた。」

「うん。その通りだけどね」

箸を取り出し説明した。

「杖か!？」

全員が身構える。

「全てを切り裂き、全てを突き刺す。そして全てを食らう」

「そっいいながら、ほろほろ鳥を箸で食べた。」

「ナイフとフォークの代わりなんだよ」

「すばらしい!!他にはどんな文化があるんだね？」

「アーサーちよつと待って、後でいくらでも聞いて良いから。重要な事を聞いてないわ。あなたが味方だと証明できる事ってないかしら?」

その時、突然、扉が開きアラスター・ムーディが入ってきた。

リーマスが動き、二人が杖を向け合う。

「合言葉は?」

「山」

「川」

「二人とも馬鹿なの?」

「そいつは誰だ」

「今の姿じゃ分からないか。さっき盾の呪文をあなたに使った人ですよ」

「そんなことわかつとる。お前、死食い人を攻撃してたが、何の目的だ。攻撃したからと言って信用はせんぞ。お前は怪しすぎる。見た事もない術を使ったり、お前の体からは闇の魔術の気配がする」

「黒魔術使うからね」

「闇の魔法使いか!？」

杖が向けられる。

「黒だろうと、あなた達の側に変わりはありません。ヴォルデモーターは僕の敵です」

「信用できないな。スネイプの件もある」

その言葉に、周りが渋い顔をする。

「この子は信用できると思うよ」

そう言ったのはリーマスだった。

「この子は、ジョージの傷を治したりロンを助けたり不思議な魔法を使うが、救ってもらったのは事実だ。それに、どうも、術を使う反動で自分の体が傷つくようだ。自己犠牲なんて、闇の魔法使いだったらありえないと思うがね」

「確かに、わしも小僧に助けられた。死食い人の打った死の呪文を跳ね返してな、それに、こいつは、ヴォルデモートと対峙して退けおったぞ」

全員が驚愕の顔をする。

「本当なの？」

「闇の力が苦手な魔法を使いましたから。マジで死ぬかと思いましたがよ」

「死の呪文を跳ね返したって、どうやったの？」

「死の呪文って強力だから防げないんですよ？だったら、同じくらい強力なのをって思って、盾の呪文と死の呪文を混ぜたんです」

「死の呪文に死の呪文をぶつけて威力を軽減させて、盾の呪文で跳ね返したということか」

「ぶつたまげー、そんな事できるんだ」

ロンが素っ頓狂な声を上げた。

「あれは、どうやった？ロンを生き返らせたのは？」

「僕が生き返った？僕死んでたの？」

「今さらなの？もういい、無視して続けて」

ハーマイオーニーがあきれた声を上げた。

「どうって言われても、死んだばかりだったなら、体が壊れていないだろうし魂も離れきっていないだろうから、入れなおしたんだよ。」

あれは、ちよつと特殊な術だから。家伝の術みたいな物かな？」

「ジャパンの術なの？」

「微妙かな、日本人の術者がいたり、中国人の術者がいたり、存在がありえない術者がいたり、こつちとは違って、基礎は一緒だけど、独自の術を使う人の魔法を混ぜて、自分流に創り直したって感じだよ」

「独自の術？すごいわね。それも強力なのばかり、あの呪文みたいなのは日本語よね？コンニチハ」

「さすがハーマイオーニー、こんにちは。あれは日本語だよ。言霊を使うだけだから、こつちの術と基本は同じだけど、強力な術を使うのにはちゃんと術を言わなきゃいけないから時間がかかるのが難点だけだね」

「言霊？」

「詳しく説明すると宗教観とか真理の説明になるから、簡単に説明するけど言葉には力がある。魔術を行使するのに魔力を言葉で導くという事。例えばルーモスの語源は光の力って意味でしょ」

「そういう事ね。でも、その歳でどうやって、そこまでの術を？」

「それは、秘密」

家族愛

「術を使うのにリスクがあるね？制御できないということなのかな？」

リーマスが聞いてきた。

「うーん。あれは、対価不足ってやつだと思う。」

「対価？」

「何かをかなえるには、同等の何かを支払わなきゃいけない。だから術を使うのには魔力を払えばよいけど、誰か何かしてあげる時に同価値の者を貰わなきゃ、代償が自分にかえって来るんだよ」

「それで、ヴォルデモートを退けたりは出来るが、人の傷を治すと傷つくわけか」

「ヴォルデモートは、襲ってきたから退けただけだからね。あれもハリーを守るためで、充分ルール違反だから、普通の術者だったら傷つくけどね。僕の魔力は多いから、多い魔力を代償に払ってる。

さすがに人の生死に関わる様な傷の時はちょっとだけ体に傷が付くみたいだけ」

「ちよつと？吐血したじゃない」

「人を生き返らせる代償が吐血だったら、軽いもんでしょ？」

「代償が成立すれば、良いって事ね？」

「うん、だから、さっき、僕が吐血した後、リーマスさんが指を怪我したのを、クッキーを代償に治したのは成立したんだよね」

「じゃあ、僕も何か払うよ」

ロンが言った。

「ウィーズリー家の誇りにかけて払わさせてくれ」

アーサーが言った。

「無理だと思う。人の命の代償ってわかってます？」

「命か」

「本気で見合うものだったら、同じ命ですね」

「だったら、私の命を」

モリーが言った。

「いらないうすって、もう自分の体で代償払っちゃいましたから」

「じゃあ何かさせて」

ジニーが言った。

「そうだぜ。俺達が双子でいられるのは、閣下のおかげなんだから」

「えー、うーん。じゃあ友達になって」

キョトンと言う顔をしている。

「そんな事でいいの？」

「閣下の仰せのままに」

笑いの輪に包まれた

ムーディーの苦手な者

黙って聞いていた、ムーディーが聞いてきた。

「それで一番重要な事を聞くが、どうやってハリーが移動する日を知っていた？まさか散歩してたら突然出くわしたとはいわせんぞ」

「うん、何て言えばいいんだろう。予言かな？」

「予言？」

「ハリーがこの日危ないっていうのを占いで出たから、ハリーのところ、移動したの、姿表しみたいなものかな」

「占いが出来るのか？お前の占いは絶対なのか？」

「大体はかな、ロンが死ぬなんて出てなかったから」

「誰が死ぬかまでわかるのか？」

「うん。占いどおりだったら、今日ムーディーさん死んでたよ。間に合ってよかった」

全員が息を呑んだ。

「ふん、死ぬなら死ぬで良いんだ。余計な事をしおって」

「嫌だよ。ムーディーさんに死んでほしくない」

突然必死になって、ムーディに懇願するように、目に涙を浮かべて言った。

「わかった。わしが悪かった。泣きべそかくな」

「ふふ。闇被い形無しね」

トンクスが笑った。

「まあ、結論は出たんじゃないかな？少なくとも味方である事に変わりはないと思うが」

リーマスが言った。

「まだだ、この先の予言もあるのか？」

「あるよ」

皆が目の色を変えた。

「教える」

「ごめんなさい。言えない」

「何故だ？」

「人の未来に関する事だから、言つと結末が変わっちゃう。細かい事だつたら、大丈夫だけど、現にありえないはずのロンの死があった。多分あれは、死ぬはずだった者を助けたからだと思う」

「わしの身代わりになつたのか？」

「多分」

「わしに関しては二度と助けるな」

「嫌だ。お願い誰も死なせないから、僕頑張るから、そんな事言わないでよ」

同じ展開、同じ答えが返ってきた。

「でも、あれはただだけないな、人を助ける為に君が傷つくのは良くない」

リーマスが、優しい声で言った。

やさしい。やさしい人だ。絶対この人を死なせない。そう心に誓つた。

「一つだけ予言を教えるね。ヴォルデモートは滅びるよ」

「それが聞ければ充分だ。小僧」

そういつて、僕の頭を小突いてきた。

「すばらしい予言を聞いた。さて、ケーキにしようか」

「待ってましたー」

双子の兄弟が息の合つた声を出した。

「まちなさい。まず、あの子にいう事があるわ」

怖い、怒られるのかな？息子を殺す原因作つたんだもん。

「ありがとう。本当にありがとう。息子を助けていただきありがとう」

モリーが言った。

「ああ、本当にありがとう」

アーサも言った。

「サンキュー」

と双子がゲーサイン

「ありがとう」

ジニーが言った。

「ほらロンも」

ハイマイオーニーがせかす

「ありがとう……！」

ロンが恥ずかしがるように言い切った。

日本文化

ハリーやたらと大人しいな。何かあるのか？悩んでるんだよな。

日本文化について、永遠と聞いてくる、ハーマイオーニーとアーサーの相手をしながら、主人公とまったく絡んでないことに気が付いた。

「日本人は、魚しかたべないの？」

「肉も食べるよ。でもやっぱり、魚とか野菜とか食べる事が多いかな」

「たんぱく質はどうしているのかしら？」

「豆とかかな、豆を加工して色々作るんだよ」

「それで、豆を腐らすのね」

「好嫌い激しい食べ物だけどね」

「日本人は風呂好きと言うから臭いの強い食べ物があるのは不思議だわ」

「ほう日本人は風呂好きなのかね。どのくらい入るのかね？」

「毎日ですね」

「毎日！？綺麗好きだ。潔癖なのかい？」

「島国だし、木の生えてる山が多いので、水には困らないんです。現実には違うんですけど」

「日本人は大きな公衆浴場があつて富士山の絵を背中に牛乳を飲むそうよ」

「ほう、すばらしいね。何故牛乳を飲むんだね？」

「そこに牛乳があつたから」

「かつこいいわ。何か分からないけどカッコいいわ」

「後は、露天風呂とかがあるよ」

「何だねそれは？」

「外の風呂だよ。日本は火山が多いから、いたるところに風呂があつて、外の風景を見ながら風呂に入るんだよ。露天風呂は開放的で

気持ちいいんだよ」

「すばらしい。よし作ろう」

「え？アーサーさん？」

「どうすればいいんだね？」

「とりあえず土を掘って温泉を掘り当てなければ」

「よし掘ろう。魔法を使えばすぐさ」

「もう、じゃあ僕が作るよ」

「代価は大丈夫なのかね？」

「もちろんもらいます」

「何がいるかね？」

「しばらく、この家に泊めてください」

「そんな事は、こちらからお願いしたいくらいだ。唯、保護者の方は良いのかな？」

「大丈夫です。死にましたから。じゃあ、創つて来ます」
外に飛び出していった。

「まずい事聞いてしまったな」

「そうですね、傷ついてないようだから安心ですね」

「そこが心配だね」

「どういうことですか？」

「あんなに幼い子が傷つかなくなるほどの事を経験してるという事じゃないか」

ハーマイオーニーは口を押さえた。

「ハリーでさえ、大変な人生を送ってきて、今だ、乗り越えられないのに、あの子どんな人生を送ってきたのかしら」

風呂と親馬鹿

窓の外をトンクスとリーマスが見ている。

「ねえリーマス、あの子、好きでしょ？」

トンクスがニヤニヤしながら言った。

「なっ何を、私にその趣味はないぞ。二つの意味でやばいじゃないか」

「そんな事聞いてないわよ。あなた、自分の子どもと重ねてるんでしょ？」

「うん、まあ、そうだな。親心を抱いてしまっな」

「私もそうなのよ。母性をくすぐられるのよね」

「あの子を見ていると、子どもが欲しいと思ってしまう」

「そうね。でも、まだ悩んでるんでしょ？あっ、あの子が転んだ」
ガシャーン

リーマスが窓を突き破って飛び出した。

抱いて帰ってくると、叫びだした。

「膝をすりむいた、トンクス何とかしてくれ」

「親ばかね、ってか何で、また小さくなってるの？」

魔法で傷を治しながら聞いた。

「服がきつかったので小さくなりました。やっぱり魔法で治療は痒いですね」

「大丈夫か！？大丈夫なのか！？」

「大丈夫ですよ。リーマスさん、心配してくれて嬉しいです」

ニコツと笑顔をのぞかせると、トンクスとリーマスが満面の笑みになった。

この時、これは使えると、腹黒い事を考えた。

「そうだ、日本式お風呂できたんで入りましょっよ」

「日本式？それは面白そうだ」

「もう出来たのかね？すばらしい」

「女性用も作ったので、トンクスさんもどうぞ」

「あら、嬉しいわね。さっそく皆に知らせなくちゃ」

皆ではいる事になり、外に皆出てきた。

「あの子は？何か準備するって言ってたわ」

「来たようだな」

「待たせてごめんなさい」

「何を準備してたんだい？」

「後のお楽しみ、早く入ろうよ。こっちが男湯、隣が女湯」

「じゃあ後でね、リーマス。あなたはどっちに入るの？」

「えっ？僕、男だけだ」

「あなたの肉体年齢なら、どっちでも良いと思うけど」

「そうかなー？やっぱ男湯」

「ふふ、じゃあ気が向いたら、いらっしやいね」

「もー早く入ってよー」

そう言っ入り口を潜った。

「ここが脱衣所だよ。日本は、裸で風呂に入るから、水泳パンツとか準備しないでね」

そう言って、手を振ると、みんなの水泳パンツが消えた。

「え？裸なの？」

ロンが、聞いてきた。

「ホグワーツもそうでしょう？」

「そうだけど。外だし」

「男たる者、隠す事なかれ」

「そうだぜロン、隠す事なんか無いぜ」

「そうともさ。それとも、隠さなきゃいけないものがあるのかな？」

双子が言った。

「わかったよ」

ロンが諦めたようだ。

風呂に入るとアーサーが感嘆の声を上げた。

「日本の風呂はすばらしい。何たる爽快感」

「こついう時、日本では、絶景かな絶景かなって言うんだよ」

「ふむ、そうか絶景かな絶景かな」

「戦いの中癒されるね。そうだろ、アラスター？」

「中々だな。裸ならば、武器を持つやつもおらんしな」

「昔の日本人も、そういう考え方で、裸で風呂に入る事にしたみたいだよ。特に仲間と信頼しあう意味で、裸の友という言葉もあるくらいだよ」

「そうか。日本人は話が合いそうだな」

「もっと気に入る事があるよ」

「なんだ？」

カスツと言う失敗の指ぱっちんと共に、お盆に載った徳利と猪口、つまみが数点現れた。

僕の悩み

「日本の酒だよ。お風呂に入りながら飲む酒は格別なんだって」

「それは、日本人はすばらしい」

「うむ、日本人とは共になりたいたいものだ」

「君の気配りは、完璧だね。子どもにしたいくらいだ」

「俺達も、飲みたいぜ。だろウジョージ」

「そうともさ、フレッド」

「逆でしょ？」

僕の指摘に二人は驚いた。

「さすが閣下だ」

「本名を教えたら、分かるよ」

「そういうものか」

「本名を教えるっていうのは、こっちでは、魂の恥を掴まれた様なものだから」

「僕も飲みたい」

ロンが近づいてきた。

「ママには言うなよ」

「わかってるよ、パパ。ハリーもおいでよ」

「うん」

「じゃあ僕も」

「君はだめだろ!!!」

全員、同時に声を上げた。

「え〜じゃあ大人になる」

そう言っつて、姿を20歳にした。

「日本では、10代で、酒を飲んで良いのか？」

「一様20歳の姿だけど」

「どうみても、13歳くらいにしかみえないよ」

「うん、つまみ消すよ。自信作なんだけど」

「ごめん、つい本音が」

「ってか、外国人が、おとなっばすぎるんだよ!!!」

「日本人てみんなそうなの？」

「一部の人だけです」

「うわーん、トンクスー」

そう言いながら5歳の姿に戻り、女湯に消えた。

「それでね、トンクスみんな、そういうんだ」

「そうね。確かに、幼く見えるわね。だけど気にしないで、あなたの長所よ」

「そうよ。可愛い事は良い事だわ」

「そうよ。私がハリーに一目ぼれしたのも、可愛かったからだし」

「そうなの、ジニー？」

「うん、そうなの。あのころのハリーは可愛かったな。今ではかっこよくなっただけ」

「ジニー女は押しよ！パパを落とした時もそうだった」

「だってハーマイオーニー」

恋話が始まったので、男湯の時と同じように、酒を出した。

こちらは、梅酒にした。

「うわーん、リーマスー」

そう言っつて、男湯に戻った。

ハリーの悩み

皆が寝静まった後、こっそり抜け出した。

「ハリー大丈夫？」

外に寂しそうに座るハリーの姿があった。

「うん、大丈夫」

「何を悩んでいるの？話して」

「君は、未来を知ってるんだよね？」

「似たようなもんかな」

「ダンブルドアの死も知ってたの？」

「知ってたよ」

「なんで助けられないの？」

正確には助ける事が不可能だったが、怒りをぶつける相手が欲しいのかと思い、従った。

「必然だから」

「じゃあシリウスも」

「必然」

「何でそんな事」

「ヴォルデモートが滅びる為に必要な代償なの、でも、ハリーは、そんな事で悩んでるんじゃないよね？」

「え？」

「ロンの事？」

しばらく経った後、ハリーが口を開いた。

「僕、今日怖かったんだ。ロンが自分の代わりに、死んだと思った。だってそうでしょ？ロンは、僕に変身してたんだよ。僕を守るために死ぬなんて、こんな」

ハリーが泣き出した。

僕はハリーの前から、そっと抱きついた。

「怖いね。苦しいね。守られるほうは溜まんないよね。お父さんと

お母さんと重ねちゃったんだよね」

ハリーの鳴き声が一層強まる。

「良いよ、泣いて。僕が、姿を隠すから」

ハリーの腕に力が入り、抱きつく力が強くなる。

「優しい子、大丈夫。誰も死なせないから。でもね一つだけ覚えて

おいて、終わる時、こうなる事は必然だったて」

そう言つて、頭に手をやり眠らせた。

「願わくば、彼等の未来に幸多からん事を」

追悼式

しばらく、楽しい生活があり、ハリーがあれ以来、事あることに僕のところに来る事になった。他にもみんなで、食事の時、僕の隣を争いだして、日替わりの日程を決めた。料理も、酒と一緒に出したつまみが美味しかった事から日本食を事あることに作らされた。ムーデイがイカの塩辛を気に入って、常備しなくては、いけなくなつたのはめんどくさかつた。

一緒に寝ると言っただけ聞かないリーマスと一緒に寝たり、ずるいと言出した皆に結局、日替わりになったり、きつと、戦争が近い事を薄々感じているのだろう、少しでも心の安住の地が欲しいのだ。

僕は、基本的に、皆の癒しになれば良いので、年齢を、ちよこちよこ変えている。

リーマスの側では、5歳にしている。

そんな生活の中、ダンブルドアの追悼式に行った。

たしか、襲われるんだっただなと思ひ、ここの周りに結界を張つた。

案の定、結界が攻撃された。

「死食い人が襲ってきました。ディメンターもいます。皆さん避難をしてください」

直後にシャックボルトの守護霊がやってきて、魔法省が落ちた事を伝えた。

「皆急いで、もうじき、守りが破られます」

バン、バン、と姿現しをしていく音がする。

「クツもう、保てない」

直後、術を破られた事で体から血が流れる

それを、合図に一齐に死食い人が襲ってきた。

ハリーが駆け寄ってきた。

「行って！ハリーにはやらなきゃいけない事があるだろ」

「でも！！！！」

「ハーマイオーニー頼む連れてって!!!」

「ツク、わかったわ。ロン、ハリー行くわよ」

「バシツという音と共に3人は消えた。」

「リーマスたちも行つて、僕の術に当たるよ」

「しかし!!!」

「あーもー、トンクスお願い!!!」

「わかったわ」

あらかた逃げた事を確認すると、両腕を突き出し、一気に十個の気絶呪文を打ち出しながら体を回転させる。

さながら、ストウーピファイのスプリンクラーだ。

しかし、数が多すぎた。

法具の指輪を出現させ、指にはめた。

一発の気を分散させ、多くの敵を打つ。

デイメンターにも効果があるようだ。

突然、大きな声があった。

「見つけたぞ。幼き者よ」

「ヴォルデモート」

「貴様には聞きたい事が山ほどある」

「僕にはないけど?」

「私にはある」

「知らない。怖いからバイバイ」

そう言つて逃げた。

「これから、どうしよう。誰がどこに行ったかわかんないしな。術を使えば分かるだろうけど、しばらくは、暇な時間だしな」

「そうだ京都に行こう。違うわ!!!ヴォルデモートの所に行こう。暇だし」

また、ヴォルデモートの所に戻った。

「ただいま」

「貴様！！！」

「僕は、君の子ども。だから、一緒に連れて行って」

「そうだったな。一緒に来い。我が子よ」

神様の特典使えるなど、思いながら着いて行った。

三河屋さんと食事と

「ちわーす、三河屋です」

「さぶちゃん、ガリーック！！！ピマーン！！！キユツカンヴァー
をお願いします」

「わかりました。ベラット・リックスさん」

ブーンと言う音と共に、子どもが消えた。

「ベラトリックス何をしている？」

「はっ！！私はいったい何を！？」

「錯乱の呪文を使われたのだ。さすがだ」

「あの餓鬼！殺してやる」

「殺気立つのは良いが、貴様、我が子を殺すのか」

「我が子！？そうでした。滅相もございません我が君。闇の帝王の
王子様に手を触れようなど恐れ多い」

「ただいま、買って来たよ」

「さぶちゃん……。王子様、よく帰っていらっしやいました」

「えゝもう解けちゃたのゝパパが解いたんでしょ？」

「そう、怒るな我が子よ。ベラトリックスは闇の帝王の右腕だ。そ
う、いじめるな」

「右腕！！！我が君、身に余るお言葉です」

「ベラちゃん、しょうがないな。右腕記念に、今日は僕がご飯作
つてあげる」

「王子様に作らせるなど滅相もございません。ワームテールにやら
せれば良いのです」

「わ、私がやらせていただきます」

「ピーター、いつの間にかいたの？良いよ、今日はぼくが作る。命令
ね。逆らわないよね？」

「ひっ！わかりました王子」

「よーし、腕によりをかけて作るぞ」

「楽しみ似ているぞ我が子よ。肉は入れるよ」

キッチンで、音程が非常にずれた歌が聞こえる中、死食い人の会議をするのに魔法力を総動員しなければいけなかった。死食い人達は、それでも音量が上がってくる声に、疲れ果てて、息も絶え絶えだった。死を覚悟する者までいた。

突然、歌が止んだと思うと、王子が現れた。

「何で皆、倒れてるの？」

「……！王子様、ご機嫌麗しゅうございます」

「全員で揃えるってキモい、びっくりするじゃんか。」

「そう言うな。どうしたのだ。我が子よ」

「うん、パパ。ご飯できたから様子を見に来たの」

「どうせ、魔力の減少で会議などできない。食事を持ってきてやれ」

「え？パパは食べたくないの？」

「そんなことはない。食べたいに決まっている」

「パパはツンデレだな」

そう、言いながら、失敗する指ぱっちんの音と共に食事が現れた。

「これは何だ？我が子よ」

「これはね、日本料理ですき焼きっていうんだよ。肉も野菜も食べられるから、みんな健康になれるでしょ？」

「良い香りです王子」

「だまれ！ワームテール。王子をほめるのは私が先だ」

ベラトリックスが怒鳴る。

「ほう？食欲をそその匂いですな王子？時にどの様な薬を使えば、これほど、甘美な匂いが出せるのですかな？」

「やだなースネちゃま、薬なんかじゃないよ。これは、僕の愛情だよ」

「話している場合ではないぞ、せっかくの我が子の料理が冷めるではないか。早速食事にするぞ」

「ちよっと待った！。この料理を食べる時は生卵につけて食べるんだよ。」

「生卵ですか王子？」

「文化が違うから戸惑うかもしれないけど、一番美味しい食べ方だよ」

「我らは、死食い人だ。そんな事にこだわったりはせん。そうだな？」

「はい。我が君」

全員声をそろえて言った。

「では、食すか・・・」

「どう？口に合う？」

「我が子よ、何と美味たる味が」

「こんな美味しいもの食べた事ありません王子」

「抜け駆けするなワームテール。王子の食事は全て私がいただく！
！！」

「叫ぶなベラトリックス。それにしても、薬も使わずこの味を出すとは恐れ入ります」

「みんな、何かキャラ違う」

小声でそう呟いた。

ピーター

食事を食べ終わった後、会議を再開したようで、何故か僕は、お風呂に入ってくるように全員から促がされた。

ヴォルデモートが根城にしている、マルフォイ家の別荘にも露天風呂を作ろうとしたが、反対されたので、しかたなく、室内の風呂を、魔法でそう見えるようにした。

「良い湯だなーこんな時は、日本酒に限る」

グビツと飲み干しながらイカの焼き物を食べる。カタツと物音がしたので後ろを振り返ると、ピーターがいた。

「あれ、ピーター、もう終わったの？」

「はい、終わりました。」

「ピーター、もっと気楽に話そうよ」

そういって、ピーターの猪口を出した。

「僕の母国の酒だよ。美味しいから飲んでみなよ」

恐る恐る飲むと、目をキユンと輝かせて言った。

「王子、美味しいです。このイカもとっても美味しいです」

「そう？よかった。ピーター、どうして、友達を裏切ったの？」

「ひっ、わ、私は、闇の帝王の為に」

「良いよ。そんな事言わなくても。君の名前からは、友を思う気持ちしか語られてこない。なのに、どうして？」

「わ、私は、言えない」

「怖い？じゃあ手を出して」

そう言っただけで敗れぬ誓いを立てた。

「王子」

「これで、大丈夫だよ。ピーター話して」

「わ、私は予言を受けた」

「それで？」

「ジエームズを・・・友を殺し、友に罪を着せ・・・闇の手の中で

光を助けよと」

「そう、それで友を殺したの？」

「それだけではない。私は、闇が怖かった。自分が死ぬのが恐ろしく、ジエームズ達の彼光が私を影の世界に追いやったんだ。だけど、僕を救ってくれたジエームズだけは殺したくなかった」

そう言つてピーターは泣き始めた。湯面に映る姿は、幼き頃のピーターそのものだった。

「大丈夫。彼らはきつと許してくれる」

そういつて、ピーターを抱きしめた。

泣く彼を魔法で眠らせ、ベット転送した。

彼を、心のそこから愛おしくおもった。

「彼の余生に幸多からん事を」

そう言つて、猪口を口に当てた。

電話会談

「新事実発覚だね。ピーターにそんな予言が合ったとは思ってもみなかったな。原作にそんな伏線あったかな」

「なかったと思うけど」

「作者さんか！？びっくりした。突然介入するんだもん。」

「なんか原作にないこと多いね。これも、君が介入したからなのかな？」

「わかんないな。ところでさ、何か話しにくいよね」

「何が？」

「作者さんと話すのって、頭に話しかけられてるみたいで何か違和感ある」

「そう、言われてもな。しょうがないじゃん」

「あれできるかな？」

「何が？」

「我望むものあり、異なる次元を繋ぎ、言葉を繋げ」

「よし、これで良いな」

「あつちよつと待って電話」

「もしもし？」

「僕、僕、わかる？」
「がちゃ」

「ごめん。僕、僕、詐欺かかってきたわ。本当にあるんだね。感動した」

「いや、僕だから！電話してるの僕だから！もう一回かけるから、ちゃんと出て」

ブルルルル

「もしもし？」

「切らないでね！めんどくさいから作者さん」

「えゝ有りですか？こんなの有りですか？」

「まあ、魔法だし。メーヴェ出せたから大丈夫かなって思って」

「何か変な気分、キャラクターと喋るって」

「それよりさ、どうなってるの？原作に載ってない事があるって」
「知らないよ」

「あんたが書いてるんでしょ？」

「いやだって、頭の中で勝手にストーリー出てくるから。それに、神様も言ってたけど、君のやっている事は、現実に起きていて、それが、俺の頭の中に流れてきて、そこに俺が介入して」

「頭痛いからやめて」

「俺も言ってる気持ち悪くなってきた」

「何か俺らって似てる？」

「僕も思った。もしかして童顔？童顔設定に全然違和感感じてないし」

「君ほどじゃないけどね。3〜5歳くらい若く見えるみたいだよ」

「本当に？けっこうな童顔だね。なんかさ大人に見られたいって気持ちと、かまってもらえるから良いなって気持ちに戸惑わない？」

「わかる。ムカつく時もあるけど、便利といえば便利だよね」

「知らない人も親切にしてくれるしね」

「そうそう、道に迷った時とか、後ヤンキーに絡まれない」

「ヤンキーって意外に優しいしね。怪しい大人とかは困るけど」

「シヨタコンね。リアルなのはやめて欲しいよね。痴漢とかされてもどう反応して良いかわかんないしね」

「痴漢された事あるの！？何回？」

「5回。君はないの？」

「俺まだ15歳だからそんなに電車に乗らない。でも、繁華街歩いてて、裏道に迷い込んだ時とか変な人着いて来て、困ったな」

「大丈夫だったの？」

「写真取らして、って言われたからピースして、飴もらった」

「危ないよ。だめだよ。お父さん許しません」

「誰が？そんな歳じゃないでしょ？」

「へへ。君よりは年上」

「うぎー」

「そういえばさ、名前を決めなくて良いの？」

「偽名は言っただよ」

「あれじゃ、だめでしょ」

「まだ、偽名決めてないんだよね」

「名は大事だからね」

「うん。名は大事。ちゃんと考えておくよ」

「それよりさ、君ピーターどうするの？」

「ピーターは助けたい。好きだし」

「同感だね。一番、人間らしいよね。何か見捨てられない感じだよ
ね」

「分かってもらえる？あんま理解されないんだよね」

「3巻の最後の、シリウスがピーターに言った。(だったら、死ねばよかったんだ) ってやつあはないよね。」

「僕もそう思う。友達を裏切るのは許せないけど、他の魔法使い達
がかなわない相手にね立ち向かえないよね。強いやつ言い分だよ
ね」

「あいつら正義感の塊だからな」

「何とか助けてあげたいよね」

「そっだね」

「今からどうするの？このままヴォルデモートと一緒にいるの？」

「そのうち、消えるよ。この前のロンの事もあるから、不測の事態
が心配」

「ってかさ、人を生き返らせたよね？真理を破壊した？」

「してないよ、時間も巻き戻してないよ」

「どうやったの？代価は？」

「魂が離れきってなかったっていうのと、魔力を大量に払ったのと、

寿命を払ったからね」

「寿命？大丈夫なの？」

「自分の事は良く分らない。」

「無理しないでね」

「リーマスさんみたいなこと言うね」

「何か弟みたいだからさ」

「ありがとう。兄ちゃん（笑）」

「がんばれよ、弟（笑）。それと、ハリーにヘドウィグ生きてる事
教えてやれよ」

ヘラトリックスの悩み相談

朝起きてボーっとしていると昨日の会話を思い出した。

「兄ちゃんっていうと前の世界の事思い出しちゃうな・・・何か気持ち暗くなる。別の事を考えなくては!!」

朝食を作りながら、卵を割っていた時、鳥つながりでヘドウィグの事を思い出した。

「そうだ。ヘドウィグの事忘れてた。今は魔法で場所分らないから、ヘドウィグ困ってるだろうな。後で届ければ良いか」

朝食をびっくりするくらいでかい、テーブルの上に運び終わると寂しく感じた。

誰も席についていないのだ。

「闇の陣営って朝が苦手なのかな・・・よし!!歌おう」

「ケロケロケロ いざ進め〜 宇宙侵略」

歌い始めたばかりの時、屋敷中から悲痛なうめき声が聞こえた。

不思議の思い、様子を見に行く為階段の下まで来ると

「お・・・う・・・じ」

そういつて、ルシウスが階段を転がり落ちた。

「ぎゃあああ。ルシウスさんの穴という穴から血がー!!!!」

パニックになりながら、呪文で傷を治すと、自分自身もぼったり倒れた。

目が覚めると、ヴォルが目の前にいた。

「ぎゃあああ!!目に毒!!!!」

「うっ。我が子よ。悲しいぞ」

「ORZしてる!!!!パピーがORZしてる!!!!ごめん、いきなり怖い顔が目の前に」

「うぐっ。」

「パピーが。―― 床に倒れて棒になった！――！落ち込まないでパピーは世界一素敵だよ」
「良くぞ言った我が子よ」
「元気になるの早！！」
「もう一度言ってくれ」
「パパは宇宙一のすてーき」
「ふははははは」
笑い声と共にヴォルデモートが去っていった。

夜になりうるちよろしていると

「王子様！！」
「！？ベラちゃん。突然脅かさないでよー。後、無駄に声高い」
「ワームテールから聞きました。王子に悩み相談が出来る」と
「何の話？」
「お風呂で悩み相談を受け付けていると」
「え？まあやった事はやったけど」
「私も相談があるので」
「ベラちゃんも？良いけど。対価が必要だよ」
「ちなみに、ピーターは自分の秘密を払ったよ」
「私に払えるものは何があるのでしょうか？」
「明日から修行に付き合って」
「修行？なんのですか？」
「魔法の」
「王子にそんなものが必要とは思えません」
「実践経験がないから、力押しの攻撃以外も修行したいの」
「私にできる事でしたら喜んで」
「交渉成立。じゃあ後でお風呂でね」

お風呂の準備をして先に湯に使っているとベラトリックスが現れた。
「それで、相談って何？」

「闇の帝王にとって私は何なのでしょう？」

「パパの右腕でしょ？」

「心は隣においてくれないのでしょうか？」

「愛か。うーん。パパも良く分かっているかと思うよ。パパは愛を馬鹿にしているし、自分が人の上に立っているら誰か自分から離れていかなければいけないところがある」

「どうということですか？」

「寂しがりやなんだよ。力に執着するのはね自分に心のそこから信頼できる仲間がないから、だけど、仲間が欲しい。だからこそ、人を力で縛ろうとする。闇の印なんかで繋ぎとめようとするんだ。」

「やはり、私は、心からの信頼は得られない」

「違うよ」

「どうということですか？」

「パパは、自分の寂しさを認めようとしないだけ。認めているのを恐れているだけ。認めてしまえば、自分を見失ってしまうから」

「どうすれば」

「パパは態度も行動も言葉も信じない。それでも、信じて続けて、願って。あなたの思いはきっと届く。人の願う力はそれほど強い。特に、魔法使いはね」

「わかりました」

「でもね、あなたの願いは、二人で一緒にでしょ？」

「何故分かるのですか？」

「あなたの名前を知っているから。あなたの願いは強い力がある。でも、2人で一緒なら良いの？そのままでは、ただの邪念になってしまう。相手の幸せを願わなければ、どんな状態でも、誰を殺しても2人なら良いというのは邪念なの」

「邪念」

「邪念は、呪と一緒に。自分も相手も不幸にする。相手も自分も不幸になって、2人で不幸の道に行く。あなたの願いわ？」

「2人で幸せになる事」

「僕はきつかけを作るだけ。後は、あなたらしい」
ゆびぱっちゃんの失敗の音と共に、ベラトリックスを眠らせた後、部
屋に送った。

ルシウスの悩み

猪口に酒を注ぎ、一杯やっているルシウスが入ってきた。

「ここで、王子が人生相談をしてくださると聞いたのだがよいですか」

「うん、まあ良いよ」

そうやって、ルシウスに酒を勧める。

「異国の酒とは、なかなかの名品です」

「分かる？あんまり手に入らないんだよ。こっちもどう？」
そういつてキセルを取り出す。

「これは？」

「パイプみたいなものかな」

ルシウスが煙を吸い吐き出した。

「なかなか、すばらしい」

「それで、何を相談したいの？」

「私は杖を失った事で、地位を失った」

「それで？」

「地位を取り戻したいのです」

「地位を取り戻すだけで良いの？」

「それ以外に何を？」

「地位を取り戻してどうしたいの？」

「マルフォイ家の力を取り戻さなくてはいけないのです」

「マルフォイ家の力を取り戻してどうするの？」

「ドラコモナルシッサも蔑まれておるのです」

「あなたの願いは？」

「家族で共に幸せな日常に」

「そこに杖や地位はあるの？」

「家族さえいれば良いです」

「そう。きつとそうなるよ。思うよつに行動すればね」

「感謝します」

失敗する指はっちんで部屋に送った。

スネイプに悩み相談

スネイプが入ってきた。

「王子、ここですか？」

「スネピーも相談？」

「何の事ですか？良い酒が飲めると聞いたので来たのですが」

「酒目当てね」

「ところで、王子は杖なしで魔法が使えるのですな。妖精の魔法に似ておりますが」

「別に使おうと思えば使えるでしょ？杖の制御無しで使う練習しないからだよ」

「確かに、制御が難しいですな。その歳で、呪文も杖もなしで使えるとはさすが、帝王の御子息ですな。指をこするのは何故ですか？
そう言われると、手をすつと払い猪口を出した。

次に、息をふつ吐くと徳利が現れ、ウインクするとつまみが数点現れた。

「別に何でも良いんだけど、何かやったほうがカッコいいから
そういつて、頭で念じると、徳利が勝手に猪口に酒を注いだ。

「何もせずとも、魔法が使えるのですな」

スネイプは目の前に浮いている、猪口を取り、飲んだ。

「なかなか、良い酒ですな。ジャパンの物ですか？」

「日本の酒だよ。これは、肉じゃが」

「うむ、おいしいですな」

「ねえ？質問して良い？」

「何ですか？」

「どうして、一人の人を一生愛せるの？」

「！？突然何ですか？」

「リーリーさんまだ好きなんですよ？」

「リーリーです」

「ファミリーネームが変わっても？」

「それを聞いてどうされるのですかな？」

「誰にも言わないよ。信用できないなら、僕の秘密を教えてあげる」

「秘密ですと？」

「僕、ヴォルデモートの子どもじゃない」

「！？どういう事ですかな」

「こついう事」

手をスツと振ってスネイプにのみ本来の感覚に戻す。

「錯乱の呪文か。我ら全員にかけるとは未恐ろしい」

「錯乱の呪文とは違うけど、そんな物かな？みんなには内緒ね」

「それで、何が聞きたい？」

「人を好きになるって、どういう感じ？」

「何に変えても守りたいという様なものだ」

「良く分らないよ。それなら、僕は、誰に対しても感じてるよ」

「子どもには難しいかもしれぬな」

「いつか、僕にも分かるのかな」

「人を愛する気持ちが分からぬのか？」

「愛は分かる。でも、たった一人って分からない。僕は、皆大事だから」

口を湯に沈めてブクブクやっている僕の頭にスネイプが手を置いた。

「いずれわかる」

とつても、やさしい。

知らない世界に来て、みんなに優しくしてもらった。

だけど、僕は皆を好きだから、誰にも心を開けない。

誰か一人に特別な愛情がもてない。

前の世界でもそうだった。

兄ちゃん元気かな。

恐怖 ベラトリックス来襲

次の日、約束どおり、ベラトリックスと修行を始めた。

多対戦の力押しなら、僕のが強いけど、一対一の技量線になると、経験がない分とっても弱い。

今は、実力を見るために決闘の最中だ。

「1、2、3」

ベラトリックスが杖をあげるより早く、僕が魔法をぶつける。

無言呪文の上に杖もなしだから、先手はこちらが取る。

「くっ」

ベラトリックスは驚きの声を上げながら、呪文をよけ、魔法を放つ。さすがに、死の呪文は使ってこないが、本気の魔法をぶつけてくる。

「プロテゴ」

「王子も呪文をいうのですな」

審判役のスネイプが聞いてくる。

「呪文のイメージを明確に持たないといけないから、とっさの時は呪文を言ったほうが早い」

「余所見をしている暇があるのですか！！！」

ベラトリックスが先頭モードに入って、狂いだす。

「ベラちゃん、呪文の連射しすぎ」

「hh」

「言葉になつてないよ！何？hhってははって笑い声の事なの！？」

「hh」

「怖いよ」

ベラトリックスが、芝生を炎で多い尽くす。

「熱！！我を守護せよ水の魂」

体の周りに水の幕を張る。だが、水は長く炎の中にいれば沸騰してしまっ。

炎を一気に突っ切り、ベラトリックスに跳び蹴りを入れようと炎か

ら飛び出す。

「読まれた!？」

ベラトリックスが待ち構えて、杖を鞭に変え、僕の体を捉える。鞭がギョウギョウと体を締め付ける。よく見ると、それは、鞭ではなく蛇だった。

息が出来ないので、無言呪文で蛇を綿にし引きちぎる。

「ベラちゃん強すぎ」

そう言つて両手の10指から呪文を打ち出す。

呪文は10倍の力で、ベラトリックスを襲う。

地面がえぐれ、小さなクレーターが出来る。

しかし、ベラトリックスは、もはや、そこにはおらず、呪文の直線的な軌道を読み、斜線上から体を横目に走ってくる。

それでも、僕の術スピードのほうが速い。口から、気絶呪文を打ち出す。

不意打ちだったにもかかわらず、ベラトリックスは反応し、呪文を弾かれた。

目の前に杖を突きつけられた。

「まいった」

「勝者ベラトリックス」

「ベラちゃん強すぎだね。後、怖い」

「王子様こそ、冷や汗をかかされましたよ。10指の魔法は、威力がありすぎます。当たったら死んでました」

「それにしても最後の不意打ち良く反応できたね」

「やってやるって顔してましたから」

「表情で読み取られたの?うわっ、すごすぎ」

「王子も良く戦っていましたよ」

スナイプが割り込んできた。

「そうかなー」

「王子の技は多対戦で力を発揮するようですな。10指の技は一直線に出すより、多対戦の時のように広範囲に術を出したほうが良い

「と思いますぞ。」

「広範囲か」

「そうです。あたれば終わりの業の威力を高めても意味はないのです。」

ベラトリックスが言った。

「ちよつとやってみるね」

魔法を放つ。10個の魔法の当たる音が重なり合い、不思議な音がした。

「これでは、先ほどのようなよけ方はできまい、ベラトリックス？」

「避けるのは無理ですね」

「今から、もう一回やる」

「いえ。一対一はもう必要ないです」

「え？まだ勝ってないけど」

「王子は術の応用や反応が悪いだけです。今から、サバイバルをして、戦いに慣れてもらいます」

恐怖のサバイバル演習

そういうことで、サバイバルに突入。

僕対ベラトリックス、スネイプ、ピーター、ヴォルデモート、グレイバック

「あーもーマジですか。何で、こんなに強いやつらと多対戦なの。岩の陰に隠れながら、嘆いていた。

不意に、何かの気配がする。

何も無いはずのところ、誰かと目が合った。

キラッと何かが光ると、僕は横っ飛びに避けた。

頭から地面に突っ込んで、みっともないが、そのまま反撃する。

盾の呪文と共にスネイプが現れる。

「目くらましを見破るとは」

スネイプが僕の横にあるつたに杖を向けると、つたがするすると動いて体を縛る。

「何で皆、縛るのが好きなの!!!」

そう言っつて、術を使い、つたを通り抜ける。

「なに!?!」

「ていやー」

そう言っつて、回転しながら10指ストウーピファイを打つ。

「くっ」

そういっつて、スネイプは物陰に隠れた。

後ろのほうでも、誰かが盾の呪文を使っている。

何人が潜んでいたようだ。

ドシンという音と共にグレイバックは倒れた。

術にあたっつたようだ。

グレイバックに近づき、気絶しているかを確認める。

「グーちゃん」

「・・・」

「返事がない。ただの屍のようだ」
ふざけている所に魔法が飛んでくる。
ピーターの襲来だった。

とても早い術の応酬に、パニックになり、反撃が出来ない。

「ピーター結構強いな」

足に魔力を込めて飛び上がり、ピーターの背後に着地し、ゼロ距離で魔法を使う。

とたんにピーターの姿が消える。

ネズミになったのだ。

ネズミに向け術を乱射するが、当たらない。

精密射撃は難しいな。

「hh」

ベラトリックスが現れた。

ベラトリックスの攻撃

王子に20のダメージ

王子は逃げ出した。

「hh」

王子は逃げ切れなかった。

ベラトリックスは魔法を使った。

王子に40のダメージ

王子はアイテム砂を使った。

砂がベラトリックスの目を直撃。

ベラトリックスは逃げ出した。

「卑怯な手を使ってしまった」

「ふははははは」

「パピー!？」

空から現れた、ヴォルデモートが、強力な魔法を使ってくる。結界を張り防ぐ。

「強い!! 攻術をするしかないか」

手をヴォルデモートに向け魔力を直接叩きつける。

ヴォルデモートが避け魔法を放ってくる。

「パピー本気か」

「当たり前だ。でなければ強くはなれぬ」

「hh」

「ベラちゃんもう復活したの!？」

「私もいるが」

「スネピー!!」

そういつて、土の壁を作り3人の術を防ぐ。後ろに回り込もうとした矢先、土が突然3匹の蛇になり体を縛り付けた。

3匹の蛇を水に変え3人を襲わせる。

3人はそれを、炎に変えた。

僕は足に魔力を溜め一気に駆けぬける。

そこに、ピーターがアニメーガスを時、杖を持って現れる。

ピーターの杖を吹き飛ばすと、どこから現れたのか3人に杖を向けられた。

「まいった」

「まさか、あの炎を防ぐとわ。さすが我が子よ」

「蛇を水に変えて反撃したのは、上手かったです」

「しかし、魔法ではなくベラトリックスを砂で撃退するとは、面白い手を使いますな」

「追い詰めたと思ったのに杖を吹き飛ばしたのが素晴しかったです」

「でも、また、負けちゃった」

「我が子よ。我ら5人の相手をし、ここまで善戦するのだ。見事としか良いようがないぞ」

「そうかなー。」

「では、また明日。戦えばよかるう。今日は、休まねばならん」

「え？もう一回やるうよ」

「疲れておらぬのか？」

「まだ、大丈夫」

「我が子よ。お前は大丈夫かもしれないが、我らは力を使いすぎておるのだ」

「まあ、いつか」

バタ

バタ

バタ

バタ

振り返ると4人が倒れていた。

「え？うそー！！僕だけ魔力無限だからか！？」

パニックになりながら、皆を建物の中に運んだ。

本編とは関係ない作者の良いわけ

はじめまして。

本編に登場する作者とは違う本物の作者です。

みなさんには、駄文ながら作品を読んでいただき本当に感謝しています。

本編に他のゲームや漫画の魔法を登場させないのは、僕に知識がないからです。

知っている漫画は週間少年ジャンプ系です。ジョジョは知りません。後は、ホリックとツバサ最終巻周辺。ガンダムは中の下くらいの知識です。

ちなみに転生者が使う十指弾はダイの大冒険のフィンガーフレアボムズをパクりました。

何かそんな知識で書くなよとか言われそうですが、生暖かい目で見守ってください。

表現力最悪な作品ですが、みなさん、よかつたら読んでください。

レトルト食品という崇高な存在

修行を始めてからしばらくたち、ヴォルデモートに呼び出された。

「我が子よ。しばらく我らは旅に出る」

「杖を探しに行くの？」

「分かるのか？」

「何となくね」

「お前を連れてはいけぬ」

「何となく分かった」

「すまぬな」

「一つだけ約束して欲しいんだけど」

「何だ？」

「人を殺さないで」

「・・・」

「お願い」

「できるだけそうしよう」

次の日ヴォルデモートが旅立った。

「これからどうしよう。ハリーたちは、しばらくグダグダしてるだろうからな。まあいつか行こうかな」

ゆびぱつちんの失敗する音と共に、移動した。

「久しぶり!!」

「くっ」

一瞬で杖を向けられた。

「え？何？」

おたおたしているとハリーが口を開いた。

「僕は君を信じていたのに!!!!」

「やめてハリー相手は子どもよ」

「でもこいつは!!」

「そうだぜハーマイオーニー」

「でもロン!あなたを助けた」

「裏があるに決まっている」

3人の言葉の意味が分からず聞いた。

「ちよつと待つて、何なの説明してくれない?」

「私、本で調べたの。あなた例のあの人の子どもなんですよ?」

「え?ああ。そこまで変わるのか」

「どういつつもりだ!何の目的だ!!」

「今説明する」

動くと術をくらいそうなので、3人の頭に真実入れる。

「え?どういうこと?」

「僕の手だよ」

「錯乱の呪文じゃないわよね?」

「違うよ」

「わけが分からないけど。あなた味方なのね?」

「そうだよ。最初に言ったでしょ」

「ハリー、杖をおろしたほうが良いんじゃないかな」

ロンの声でハリーが杖を降ろした。

「死ぬかと思った」

「それより、あなたどうやって保護魔法を破つたの?」

「破つたんじやないよ。保護魔法を通り抜けただけ」

「そんな事できるの!?!」

「できてるでしょ?」

「そうね。そう」

「君は何で来たの?」

ロンが聞いた。

「暇だったから遊びに来た」

「ぶざけるな!!遊びじゃないんだ!!!!」

「ハリー外して」

「ハーマイオーニーがホーラックスをつけているハリーに言った。

「それ、しばらく封印しようか？」

「出来るの？」

「つけている本人の心が安定しているなら惑わされない程度には出来るよ」

「対価はどうなるの？」

「そうだな。時が来たらあるものをもらおう」

「怖いわね」

「ハリーが捨てる物だから大丈夫だよ」

「僕が捨てるもの？」

「今は知らなくて良い」

「何でも良いよ」

ハリーがまたイライラしだした。

「それを、そこにおいて」

ホーラックスの上に手を置いて、目をつぶり魔法陣を出現させる。

ホーラックスが浮き出し、目の前に来たところで、ホーラックスの周りに円を描くように手を動かす。

「できたよ」

「もう？」

「うん。でも、これはつけている本人の意思によるところが大きいからね。特にロンとハリーは気おつけてね」

「わかった」

「うん」

「前から言おうと思ってたんだけどさ」

3人が真剣な顔でこちらを凝視する。

「ロンって背が高いのに可愛いね」

「え？」

ロンが驚いた顔をして顔を赤らめる。

ハーマイオーニーがくすつと笑い、続いてハリーが力を抜かしイスに

座る。

「何だよそりゃ」

「だって、発言が何か子どもみたいで可愛い」

「君が言うな!!!」

3人が声を揃えて言った。

「そういえば、みんなちゃんとご飯食べてる?」

3人のやつれた姿を見て言った。

「あまり、ちゃんとしたものはないわね」

「おいしいものなんか何もないんだ」

「魚を焼くくらいしかないよ」

「魚ってちゃんとしてるよ」

「焼いた魚だけだぜ」

「私達、あまり料理をした事がなくて、焦げちゃうのよね」

「じゃあ、ご飯の作り方を教えてあげるよ」

「本当に?でも簡単に出来るのかしら?」

「とりあえず、ご飯作ろうか」

魔法で飯ごうを出し、米を研ぐ。3人にも教えながら「ご飯を炊く。

野菜の切り方も教える。

「デイフィンド」

「こら!魔法使うな」

ロンが魔法を使ったので叱った。

「だって楽でしょ」

「手作りが美味しいの」

「こんな感じで良い?」

「え?ハリー上手いな」

「うそ?私より上手」

「僕は、ダーズリーのところで料理担当だったからね」

「そういえば、そうか。カリカリベーコン作ってたね」

「君は何で知ってるの!?!」

「しまった・・・」

第一巻の記述だったな。どうしよう

「それも、君の力？」

「そうそう、僕の力」

「まあ、何でも良いや」

お湯で、野菜を煮て火が通ったところでカレー粉を入れる。

「この匂い、カレーアンドライス」

「こんな本格インド料理作れるんだね」

「あらやだロン、少し前までは、イギリスでも家庭料理だったのよ」

「カレーのルーと野菜入れれば作れる料理だから簡単でしょ」

「・・・」

「・・・」

「カレーのルーって何？」

「何いってんのロン？それに二人して何で無言？」

「忘れてた！！レトルト食品使えばこんな生活せずに住んだのに

！！！」

「そうだわ、冷凍食品だってあるわ。その手があったのよ」

「何それ？」

「マゲルの食べ物で、火で暖めるだけで、料理が出来るんだよ」

「え？何それ魔法みたい。魔法とは違うの？」

「出来てる料理を腐らないようにしてるだけだからね」

「魔法生活長いから忘れてたわ」

「まあ今度買ってくるから、しばらくは我慢してね。とりあえず食

べよっ」

皆でカレーを食べ始めた。

「美味しいー！」

「何か、イギリスで食べるのとは違うね。でも美味しい」

「うぐっ ヒツグ グスン」

「ロン泣かないでよ」

「だってー」

「喜んでもらえて光栄だよ。これは日本の味付けのカレーだからね」

「私知っているは、日本ではカレーライスって呼ばれてるのよね？」
「博識だね」

「あーあ。これで、ホーラックスを破壊できる方法が分かればな」
「え？まだ知らないの？」

「君は知ってるの？」

「安全な方法よね？」

「バジリスクの毒を吸ったグリフィンドールの剣とバジリスクの牙」
「そうか！そうなんだ。だからリドルの日記も」

「でもだめね。そんなに簡単に手に入らない」

「ごろごろ転がってるわけじゃないし、君が取ってきてくれれば」

「だめ。自分達でやって」

「何でさ？」

「そうしなればならないから」

「そうね、私たちが成し遂げなければ」

「真の勇気を示せば大丈夫だよ」

「僕は、もう行くね」

「もう行っちゃうの？」

「いろいろしなきゃならない事があるからね。料理のレシピと、山
菜の見分け方の本置いていくね」

僕は姿を消した。

番外編 新入生の悪夢

聞いてほしい事がある。

僕の生まれは魔法族。って言ってもピンとこないか、僕の家系は代々魔法使いなのだ。

魔法を信じない人もいると思うけど、魔法は実在するんだ。だって、僕のお父さんもお母さんも、じいちゃんもばあちゃんも、果てはおじさんも、皆、杖を振るだけで、不可思議なことをやってのけるんだから。

ある日、例のあの人が復活したという噂が流れた。

どうやら、ぼけた爺さん。もといホグワーツ校長ダンブルドアが言っているらしい。

それからの毎日は地獄だった。僕のパパが、今日から自分を守るように特訓をすると言い出したのだ。毎日の過酷な修行の中8歳で、守護礼の呪文を使えたことは、最年少だと親は喜んだ。だけど、食事に毒が入っていたり、寝ている時に闇の魔法を打たれるのを修業というんだろうか？ママもママで、風呂に入っていようが、ご飯を食べていようが、攻撃呪文をかけてくる。

最初の頃は、当たってしまったが、今では、無言呪文で防げるようになった。ちなみに、おはようの挨拶に、ステューピファイを打つてくるのは日常の光景だ。

そんな、不思議な毎日の中、一通の手紙が届いた。

ホグワーツ入学の手紙だ。

ありえない。ありえなさすぎる。僕が魔法を使えるから覚悟はしていた。けどとつても行きたくない。なぜなら、今、魔法界はヴォル・・・例のあの人に牛耳られてるからだ。

こんな時期にホグワーツに行きたい訳がない。行きたい奴なんて、闇系の子供か、自殺志願者だけだ。どちらでもない僕が行きたくないのは、皆共感してくれるだろう？

そういう理由から、手紙は親に見られる前に燃やした。

次の日、朝の眠さを晴らそうと外に出ると飾りであるメールボックスが、体積を無視して膨張していた。メールボックスから「助けてくれ・・・」という声が聞こえたから、開くと、体が吹っ飛ばされ、壁に打ち付けられるほどの勢いで顔面を手紙が襲った。インゼンディオで燃やした。紙の勢いで顔中が切れたが、ママに治してもらい、治療呪文も教えられた。

次の日、昨日の炎の真ん中で笑っている、人の悪夢が災いしたのか、寝ぼけ眼で部屋のカーテンを開けた。外が見えなかった。目をこすつて、もう一度見るが、やはり外が見えなかった。アグアメンティで顔に水をかけたが、やはり外は見えなかった。良く見ると、覆っているのは、手紙だった。

家のカーテンじゅうを開けてみたが、全て手紙で覆われていた力の限り。ちなみに全部のカーテンを開けるのに20分かかった。

次の日、ドアを開けると目の前が真っ白になって、体に濁流のような圧力が流れた。パパとママがいるリビングに入る前に燃やした。パパとママはなんか焦げ臭いといっていたが、悪霊の火を使うのに失敗して髪の毛焦げちゃったと言っておいた。嫌がらせのように、大量の手紙が雨の様に降ってきた。

さすがに親にバレた。

とうとう僕は、死亡フラグ満載のホグワーツに入学する事になった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4196q/>

ハリーポッターに怒りの転生

2011年10月31日06時47分発行